要領様式第２号

出張報告届

令和 7 年 10 月 16 日

吹田市議会議長様

会派名　自民党吹田・無所属の会

代表者氏名　白石　透

出張者氏名　白石　透

下記のとおり出張したので届け出ます。

吹田市議会事務局
7.10.16
受付

記

出　張　先	ライトキューブ宇都宮
期　　間	令和7年10月　8日から　10月　10日まで　3日間
出張の成果	別紙のとおり
備　　考	第 87 回　全国都市問題会議 成熟社会の都市のかたち ～コンパクトで持続可能なまちづくり～ 会議は令和 7 年 10 月 9～10 日ですが、初日開会時間が午前 9 時 30 分の為、前日に現地入りしました。

第87回全国都市問題会議　　報告書

日程：令和7年10月9日（木）・10日（金）

会場：ライトキューブ宇都宮　（宇都宮駅東口交流拠点施設）

講演者・パネリスト　広井　良典　京都大学名誉教授

佐藤　栄一　宇都宮市長

南　　学　東洋大学　PPP研究所

大西　秀人　高松市長

森本　章倫　早稲田大学理工学術院教授

内田　奈芳美　埼玉大学大学院教授

吉田　　元　関東自動車（株）取締役社長

山下　裕子　まちなか広場研究所主宰

青山　　剛　室蘭市長

伊木　隆司　米子市長

今回のテーマは成熟社会の都市のかたちとして、コンパクトで持続可能なまちづくりとされており、今後の日本の総人口の減少は既定路線である中、一方では東京などごく一部の都市への人口流入は続

いている中での都市機能のあり方などがテーマであった。

開催市の佐藤宇都宮市長の話にたいへん興味をもった。

市域の約 8 割が平坦な地形という地域特性を背景に、かつて中心市街地を核に人口や都市機能がコンパクトに集中していたまちは人口増加に伴って郊外に拡散していき、市街地の外延化の進行により、都市機能や居住の密度低下が生じ、人口減少社会においては、中心市街地の活力低下や空き家・空き地の増加、公共交通空白地域の増加、地域コミュニティの衰退といった、様々な問題が懸念されることから、平成 19 年度に策定した「第 5 次宇都宮市総合計画基本構想」において、これらの人口規模・構造や都市活動に見合った都市の姿である「ネットワーク型コンパクトシティ」を長期的なまちづくりの方向性として全国に先駆けて位置づけたとの事。早くから行動を起こしていたところなど、元々民間企業に勤めていたとのことで共感が持てた。私も民間企業に勤めていたこともあり、スピード感、柔軟さなどは民間と行政の違いは感じている。

特にライトラインの整備にはその成果は如実に表れていると感じた。

ライトラインは、全国初の全線新設の次世代型路面電車で、地域新電力会社「宇都宮ライトパワー株式会社」が供給する、家庭ごみ等の焼

却によるバイオマス発電などの地域由来の再生可能エネルギーのみで走行する「ゼロカーボントランスポート」であり、人と環境に優しい運行を実現している。また、開業前と比較した自動車からライトラインへの転換台数は平日1日当たり約5000台と試算され、さらに、沿線道路の1日当たりの自動車交通量は約2000台減少するなど、自動車から公共交通への転換が進んでいる。さらに、整備区間公表以前と比較して令和6年のライトライン沿線の居住人口は約10%増加、住宅地の地価は約14%上昇しているほか、沿線に位置する清原工業団地では開業前後に公表された投資額が1,100億円を超えるなど、まちづくりへの大きな成果が表れている。かつて私も経済ニュースで見ているが、実際に現地視察もし、多くの名の知れた企業が並んでいた。宇都宮市の事例はもともと交通の要所であり、地形が平坦であり、首都圏まで近いことなど、地の利があるところであったが、市長は南北の鉄道はあるが、東西にないことに目をつけ、ライトラインを考えたと言われていた。今後は駅西側の計画も進んでいるようで、益々利便性は向上していくだろうと感じた。

また、南　学氏の話では成長型から成熟型への社会変化は、人口がピークアウトして減少化していくので、さまざまな分野での構造変化

が生じることとしてとらえる必要がある。単なる「減少」「削減」ではなく、社会経済構造そのものの変化である。量から質、集中化から分散化、個別化から連携化、ヒエラルキー型からネットワーク型など、構造変化に関するキーワードがいくつも生まれ、議論されている。

次の数十年後のビジョンを想定するキーワードとして「縮充」という造語を考え、これは「拡充」の時代から「縮小」の時代への変化をネガティブとして見るのではなく、縮小しても機能の充実につながれば、むしろポジティブな将来像も描けるのではないかと考えて生み出したとのことであった。また、公共施設マネジメントは喫緊の課題であり、例えば図書館の利用に関して圧倒的に高齢の男性（特定の人）が利用されていてまるで貸切のようにヘビーユーザーが利用されているなどのデータがあると言われていた。思うに定年を迎えた後の自分の居場所だと容易に推察される。この様な事も公共施設マネジメントに限らず、成熟社会における都市のあり方検討にも十分に応用可能だと強調されていた。

また、行政視察では幸手市の市長さんと一緒になり、恥ずかしながらどこにあるかも知らない市の市長さんであったが、長いこと民間企業で仕事をしたのちに現職をされているとの事で多方面にわたり

色々と話を聞かせてもらい自分自身の糧となった。